

月例研究会（2023年9月1日）

HOSEIミュージアム×法政大学大原社会問題研究所
HOSEIミュージアムテーマ展示
「社会を記録する」
開催記念ギャラリートーク

伊東林蔵・土井雄貴

「社会を記録する」は、HOSEIミュージアム6つのテーマのうち〈働く人々とその社会の探究〉をテーマとし、2023年9月1日から2024年4月27日まで、展示を入れ替えつつ開催される。本ギャラリートークは、その開催を記念して2023年9月1日に3回にわたって行われたものである。最終回が月例研究会を兼ねて行われた。

展示構成は、全体のイントロダクション、「貴重書展示 第1部：マルクス——社会を変革する」（以下、貴重書展示）、「『関東大震災写真集1923・9』展示 第1部：都市の被災状況」（以下、写真集展示）である。約100年前に蒐集された資料を通して、様々な媒体で「社会を記録する」意味を考えることが展示の目的である。

ギャラリートークは、イントロダクションと写真集展示を土井が、貴重書展示を伊東が担当した。イントロダクションでは、入口スクリーンに上映されている「神戸川崎・三菱労働争議」の実写フィルム（日本労働ベンクラブ「労働遺産」第一号）の映像や、大原社会問題研究所が100年以上続けている『日本労働年鑑』の編纂事業を紹介した。『日本労働年鑑』第1集（1920年刊行）の「緒言」をもとに、大原社会問題研究所が創設当初より社会を記録し、広く資料を公開してきたことを示した。

貴重書展示の解説では、創立間もない時期に巨費を投じた、1年以上にわたるドイツでの貴重書の蒐集事業を、櫛田民蔵に注目して解説し

た。展示した『資本論』、『共産党宣言』、「新ライン新聞」終刊号の入手経緯だけではなく、現地でのシュトライザント書店、ドイツ社会民主党、ソ連の研究者との交流を、当時の書簡や贈呈された書物の展示を通じて紹介した。

写真集展示の解説では、286枚から成る写真集の成り立ちから解説を行った。写真蒐集の経緯を示すため、関東大震災時の大原社会問題研究所の活動を、展示に反映できなかった東京在住所員の安否確認なども踏まえつつ紹介した。その後、「都市の被災状況」「震災時の死者」「街の様子」ごとに展示した写真を紹介した。

以上を通して、記録によって当時を想起できることの重要性と、大原社会問題研究所の蒐集した記録媒体の多様性を強調した。

参加者からは、現在多くの版が出ている『資本論』の原書の出版経緯や、マルクス自身の生活、革命への関わり方について質問が寄せられた。回答として、研究者の道を断念したマルクスは、記者となり、ロンドンへと亡命後『資本論』を執筆し、ハンブルクの出版社から初版が出たこと、マルクスは執筆活動を中心とする国際的な革命運動を行ったことを紹介した。関東大震災については、朝鮮人虐殺についての質問が寄せられ、文献を紹介した。また、写真集に保存された写真はどの地域のものかという質問には、市街地やバラックが形成された地域が多く、東京の写真が多くを占めると応答した。

展示に際し、野上記念法政大学能楽研究所より江島伊兵衛が当時撮影した関東大震災の写真をお借りし、一部紹介した。また、HOSEIミュージアムの北口由望氏に関東大震災時の法政大学についてのパネルを大学史ゾーンに設置していただいた。以上のように、HOSEIミュージアムが大学内の連携を行う場として機能したことも併せて記載しておきたい。

（いとう・りんぞう 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）

（どい・ゆうき 法政大学大学院社会学研究科博士課程／大原社会問題研究所兼任研究員）